

介護職における省察に関する研究 —単純集計結果を中心に—

Study on Reflection in the Care Job —Focusing on Simple Counting Result—

水野 尚美 岡本 浄実¹ 村上 逸人² 野田 由佳里³
MIZUNO Naomi OKAMOTO Kiyomi¹ MURAKAMI Hayahito² NODA Yukari³

キーワード：介護職，省察，学習する組織，研修，アセスメント

Key Words：Care workers, Reflection, Learning Organization, Training, Assessment

1. はじめに

1-1 省察に関する研究の動向

省察は、Reflection（以下、リフレクション）という用語で学校・看護教育で研究されている。Dewey のリフレクション¹⁾は、Donald A. Schön（以下、ドナルド・ショーン）の反省的实践家として思考・概念として広まった。ドナルド・ショーンは、リフレクションを実践家が行為のなかで問題を認識し、熟考し問題解決を行う「行為の中の省察（reflection-in-action）」と、行為などのあとに振り返り、省察する「行為についての省察（reflection-on-action）」に分けている。また、「技術的熟達者」と「反省的实践家」の専門家を論じている。「反省的实践家」とは、活動過程において「知」と「省察」それ自体が専門家の専門性であると考えられる考え方である²⁾。矢部らは介護福祉士の主な思考と実践過程を介護過程と位置づけている³⁾。藤原は、介護過程における専門性はドナルド・ショーンの「反省的实践家」に理論に当てはめると述べている⁴⁾。

介護福祉分野においては、省察に関する研究は4件（CiNii:2014年12月9日現在）である。堀は、実践における「省察」とは、状況と探求の中で問題を設定し、問題に即興的に対応、その対象を省察することであると述べ、認知症介護の分析・考察の枠組みとして妥当であると述べている⁵⁾。また、藤原は、学生の気づきを中心にプロセスレコードを分析し、驚きを伴う感情は省察に有効であることを明らかにしている⁶⁾。

一方、教育・看護・保育では、様々な省察に関する研究が行われている。他の専門職における省察の研究を概観する。杉山は、教師の力量のうち、教科指導に関わる力量について考えた場合、授業の構想・実施・省察という授業実践の一連のプロセスを経験できる模擬授業は一定の役割を担うものと考え、省察の視点をメタ認知することで、学生自身の省察の実態を問い直し、活動以降の省察過程で多面的な省察が行えるようになると述べている⁷⁾。また、看護分野では、上田らが看護者自身による看護実践のリフレクションに関する国内文献を対象に、リフレクションの内容とリフレクションによる看護職の内面的変化、リフレクションによって期待される看護実践への効果を検討している⁸⁾。保育分野における省察に関する研究の多くは、事例に基づき行われてきた。省察のプロセスを5つの小課程（①実践、②想起、③記録の記述、④解釈、⑤再び実践）からなるサイクルとして捉えた、浜口の研究⁹⁾などがある。他方では、杉村ら^{10) 11) 12)}のような、省察を計量的なアプローチで行っている研究は少ない。杉村ら¹²⁾は、Grimmett¹³⁾の、授業における教師の3つの省察レベル^{注1)}、名須川^{14) 15)}の、子どもに対する気づき・保育者自身に対する気づき・他者との話し合いといった他者の存在、という3つを区別するという先行研究から保育の省察モデル^{注2)}を示した。

¹京都文教大学 Kyoto Bunkyo University

²同朋大学 Doho University

³聖隷クリストファー大学 Seirei Christopher University

1-2 介護現場における省察

利用者を主体とする生活支援活動の展開が求められている。その方法として利用者理解を図りながら学習した専門的な知識と技術を統合して、介護計画を立案し適切な介護を提供できる能力を養う科目が「介護過程」である。高橋は、質の高い介護福祉士とは、専門職者としての観察力と強い使命感を兼ね備えた実践者である。エビデンスに基づく介護福祉観の確立と職業倫理を基盤とする高次な人間性の、その一助を担うのが「介護過程」と考えると述べている¹⁶⁾。また、松本らは、介護福祉士の質の向上が叫ばれる今、社会人基礎力の育成が求められる背景と同様、課題の発見、解決に向けた実行力、異分野との融合するチームワークなどの能力が強く求められており、介護福祉士養成教育においてもやはり社会人基礎力の向上の視点は欠かせないものであると述べている¹⁷⁾。「介護過程」とは、介護を実践するための思考と実践のプロセスである。客観的で科学的な根拠に基づいた介護の実践を行うためには、介護過程の展開ができる力を身につけなければならない。「評価」を行い、援助を振り返り、再度、アセスメントすることで、よりよい利用者の生活支援を実現していくことになる。松本らも、実習現場で介護過程を展開するためには、社会人基礎力のいう「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の三つの力はいずれも欠かせない。また、「考え抜く力（シンキング）」は、介護過程のプロセスで最も必要とされる力ともいえる。「課題発見力」や「創造力」はアセスメントを行う際に求められる力であり、介護計画の立案をするためには「計画力」はなくてはならない。そして、「評価」を行う際には、「課題発見力」が求められる¹⁷⁾と述べており、社会人基礎力と介護実践で重要となる力との共通性があると言える。

また、藤江らは、介護福祉士が専門性を持った質の高い対人援助者になるために介護は利用者の生活に密着し、介護者と利用者の人間性が相互に作用しながら発展していく実践であることを踏まえると、介護福祉士の資質向上をめざすうえで「振り返り」という思考過程を構造化・体系化することには重要な意味があると述べている¹⁸⁾。

以上のことから筆者らは、介護で行われている「繰り返し」の量的アプローチを試みた。村上らは、福祉の対人援助専門職である保育士を対象とした杉村らの省察モデルを用いて介護職員の省察行動を調査した¹⁹⁾。結果、介護者に関する省察では2因子「利用者考慮」「自己介護観」、利用者に関する省察では3因子「利用者分析」「利用者変化」「利用者共有」、他者情報に関する省察では1因子「チームケア」の6因子を確認した。また、自己のケアを振り返る力（リフレクション：行為についての省察）を4つのタイプに分類した。省察の4タイプと主な研修内容は、①自己注意がやや高く利用者を観察する力がある＝可視化プログラム、②他者を通じた情報活用力はあるが、新しい知識には興味がない＝画像を用いたプログラム、③他者を通じた情報収集や活用の仕方がわかっていない＝コミュニケーションプログラム、④情報収集はできて活用ができていない＝シームレスプログラムである。

2. 研究目的

本研究は、介護の省察尺度を開発するための基礎的研究である。省察行動に関する調査では、村上ら¹⁹⁾の「他者を通じた省察に関する項目」を介護場面に近い質問項目に改定し、介護者自身の省察行動および利用者自身の省察行動との信頼性と妥当性を検討する。また、質の高いケアには、チーム力が関係すると考える。今回の調査では「チーム力」を、遠藤ら²⁰⁾が述べている「チームの学習能力（自らを動かす力・複雑性を理解する力・共創的に対話する力）」とし、省察行動（自らが反省し考察を加える思考過程）がチームの学習能力に及ぼす影響を明らかにするために行った。

3. 研究方法

3-1 調査対象者及び調査期間

A 府（特別養護老人施設 80 名）、B 県（特別養護老人施設 80 名、および老人保健施設

20名)に勤務する介護職員(180名)を対象とした。対象施設は、筆者らの介護福祉士養成課程における介護実習施設の中から「省察に関する調査」にご協力をいただける施設に依頼した。調査は、2014年11月7日から11月21日に実施した。

3-2 調査方法

調査を依頼した施設長を通じて、質問紙を配布。回収は、郵送によって回収を行った。

3-3 調査内容

基本的属性として、性別、年代、介護者として勤務年数、雇用形態、介護に関連する保有資格の有無を尋ねた。保育者の省察に関する項目は、2009年に杉村らが行ったもの¹²⁾をもとに村上ら¹⁹⁾が行った介護における省察の関する調査結果から質問に修正した。また、介護におけるチーム力を遠藤ら²⁰⁾の学習する組織に関する質問から構成した。質問は、以下の3つの省察と5つの学習する組織の領域で構成した。

(1) 省察に関する質問

- ①介護者自身に対する省察に関する項目 12項目
- ②利用者に関する省察に関する項目 12項目
- ③他者をとおした省察に関する項目 12項目

(2) 学習する組織に関する5領域の質問

- ④学習する組織「チームに関する考え」5項目 *以下「チーム」
- ⑤学習する組織「コーチングに関する考え」5項目 *以下「コーチング」
- ⑥学習する組織「組織に関する考え」5項目 *以下「組織」
- ⑦学習する組織「遊び心・ユーモアに関する考え」5項目 *以下「遊び心」
- ⑧学習する組織「あなたの考え方に関する考え」5項目 *以下「考え方」

回答は、「まれにある」「たまにある」「ときどきある」「よくある」「いつもある」の5件法によって回答を求めた。

また、省察に関する質問において介護場面を想定し、子どもを利用者(サービスの対象者)、保育者を介護者、保育観を介護観、他の人・他の保育者については具体的に他の介護者・他の専門職に変更した。また、他者を通した省察では、3つの質問についてケアプランに基づいて作成される介護過程の展開を設定した(表1)。

表1 他者を通した省察に関する質問の変更例

杉村(2009)保育者の他者を通した省察の質問	変更	本調査の他者を通した質問
他の人の保育を見て、自分の保育に必要なことに気づくことがある		他の介護者の利用者に対する話し方に注意することがある
他の人が子どもにどのように接しているかを注意深くみることができる		他の介護者が利用者にとどのように接しているかを注意深くみることができる
他のクラスの子どもの保育者と関わる様子を注意深く見ることがある		他の介護者と自分の担当する利用者の話をする中で、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある
いろいろな話を聞いて、自分の保育観を見直すことがある		いろいろな話を聞いて、自分の介護観を見直すことがある
他人と子どもの話をする中で、自分が担当している子どもの特徴に気づくことがある		自分が担当している利用者以外と話をする中で、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある
他のクラスの子どもの保育者と保育者が話す様子を注意深く見ることがある		他の専門職が利用者にとどのように接しているかを注意深くみることがある
他の人と話しているうちに、保育に関する疑問が解決することがある	○	介護過程の展開を意識して介護をしている
他人と子ども達と話をする中で、自分が担当している子どもの特徴に気づくことがある		他の専門職と自分の担当する利用者の話をする中で、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある
他の保育者が担当している子どもの言動を注意深く見ることがある		他の介護者が担当している利用者の言動を注意深く見ることがある
保育に関する本や雑誌を読み、自分の保育観と照らし合わせるがある	○	他の介護者の介護過程の展開を自分の介護にいかすことがある
他の人と保育の話をして、自分の保育の方針を改めることがある	○	自分が担当している利用者の介護過程の展開を定期的に見直している
他の保育者の子どもに対する話し方に注意することがある		他の専門職の利用者に対する話し方に注意することがある

3-4 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮として、調査票の表紙に調査の目的を始め、調査が無記名で行われること、個人を対象とした分析は行わず、調査結果は全て統計的に行われることなど個人情報保護について説明を記し、調査の回答を持って同意することとし、回答を得た。

3-5 分析方法

SPSS (version21) を用いて分析を行った。

回答を「まれにある」を1点、「たまにある」を2点、「ときどきある」を3点、「よくある」を4点、「いつもある」を5点に数量化し分析した。省察に関する3つの質問と学習する組織の5つの領域の平均値を求めた。

3-6 結果

回答数 103 名 (73.6%) のうち全回答者 98 名を対象とした。

(1) 対象者の概要

男性 40 名 (40.8%)、女性 58 名 (59.2%) が 6 割を占めている。図 1 に対象者の年代を示した。最も多い年代は、30 歳代の男性で 43 名 (43.6%)、最も少ない年代は男性の 60 歳代以上で 0 人であった。雇用形態は、全体では正規職員が 85 名 (86.7%) であった。保有資格では、全体の約 7 割が介護福祉士であった (図 2)。

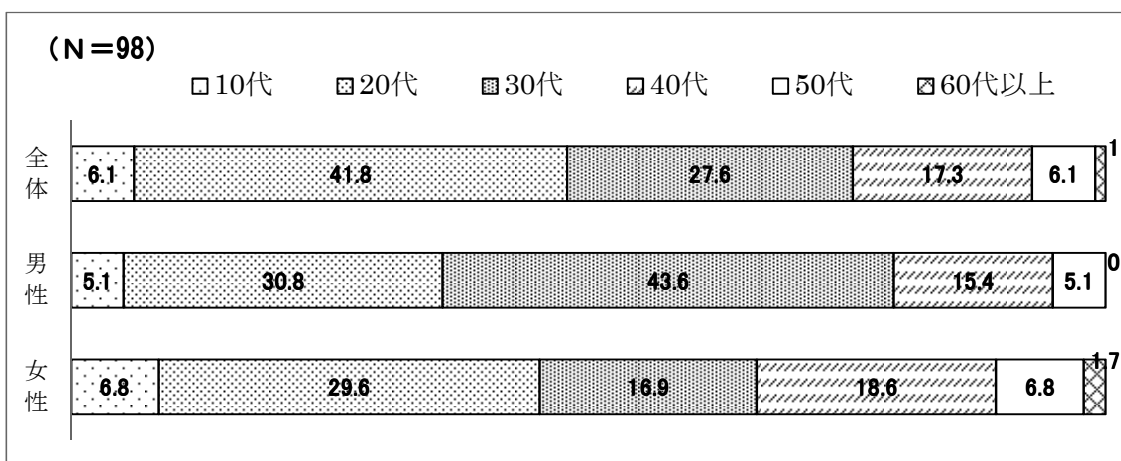


図 1 対象者の年代

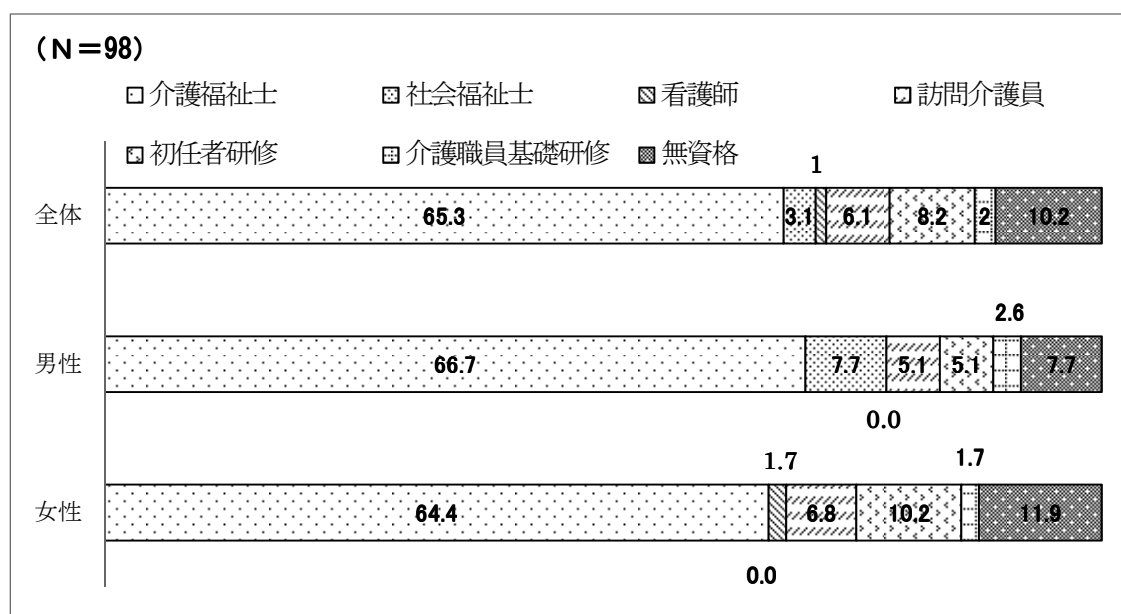


図 2 対象者の保有資格

(2) 省察尺度

①介護者の省察

全体では、「利用者と話するとき、自分の言動や態度を意識することがある」が4.0点で最も高い介護者自身に関する省察行動であった。男性では、「利用者と話するとき、自分の言動や態度を意識することがある」「利用者に対する自分の行動に気をつけることがある」の2項目において4.0点で高いことが明らかになった。女性では、「介護者としての信念について考えることがある」の項目が3.0点で最も低いものであった（表2）。

表2 介護者自身に関する省察項目の平均値（男女別）

項目	男性	女性	全体
介護において自分の振る舞いに目を向けることがある	3.9	3.8	3.9
利用者と話するとき、自分の態度に注意を向けることがある	3.9	3.8	3.9
利用者と話するとき、自分の言動や態度を意識することがある	4.0	3.9	4.0
利用者に対する自分の行動に気をつけることがある	4.0	3.8	3.9
利用者と話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	3.6	3.6	3.6
利用者に何か言う前に、自分の言動の影響を考えることがある	3.2	3.4	3.3
利用者に何か言った後、その時の自分の感情について考えることがある	3.2	3.4	3.3
利用者に何か伝えるとき、自分の言動や態度を意識することがある	3.7	3.6	3.7
介護者としての自分の長所・短所を考えることがある	3.7	3.3	3.4
自分の介護方針を振り返り、改善すべきところを考えることがある	3.6	3.3	3.4
利用者を介護するということは、どういうことか考えることがある	3.4	3.3	3.3
介護者としての信念について考えることがある	3.2	3.0	3.1
平均	3.6	3.5	3.6

②利用者の省察

「利用者と一緒にいるとき、利用者の行動に注意を向けることがある」が4.3点で男女とも最も高く、次いで「利用者と話しているとき、利用者の表情や態度に注意することがある」が4.1点であった。一方、「利用者にとって、将来何が必要か考えながら介護をしている」「利用者に関する長期的見通しについて考えることがある」の2項目が3.1点で最も低かった。「利用者の言動に気をつけている」では、男性3.8点、女性4.1点で女性の方が高く、「利用者の普段の行動から、利用者の長所・短所を考えることがある」では、男性3.5点、女性3.2点、であった（表3）。

表3 利用者に関する省察項目の平均値（男女別）

項目	男性	女性	全体
利用者と一緒にいるとき、利用者の行動に注意を向けることがある	4.3	4.3	4.3
利用者の言動に気をつけている	3.8	4.1	4.0
利用者と話しているとき、利用者の表情や態度に注意することがある	4.1	4.2	4.1
利用者と話した後、利用者がどのように受けとめたか、考えることがある	3.6	3.7	3.7
利用者がどう変わってきたかを考えることがある	3.8	3.6	3.7
利用者と話す前に、利用者の受けとめ方について考えることがある	3.5	3.4	3.4
あらかじめ利用者の行動や態度を予想しておくことがある	3.8	3.6	3.7
利用者のこれからの行動の変化について考えることがある	3.5	3.4	3.4
利用者にとって、将来何が必要か考えながら介護をしている	3.2	3.1	3.1
利用者の普段の行動から、利用者の長所・短所を考えることがある	3.5	3.2	3.3
利用者に関する長期的見通しについて考えることがある	3.2	3.1	3.1
介護の出来事から利用者の本質について考えることがある	3.2	3.2	3.2
平均	3.6	3.6	3.6

表4 他者をとおした省察項目の平均値（男女別）

項目	男性	女性	全体
他の介護者の利用者に対する話し方に注意することがある	3.2	2.9	3.0
他の介護者が利用者にとどのように接しているかを注意深くみることができる	3.9	3.6	3.7
他の介護者と自分の担当する利用者の話をすることで、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある	3.6	3.5	3.5
自分が担当している利用者以外と話をすることで、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある	3.2	2.9	3.0
他の介護者が担当している利用者の言動を注意深く見ることがある	3.6	3.4	3.5
いろいろな話を聞いて、自分の介護観を見直すことがある	3.6	3.4	3.5
介護過程の展開を意識して介護をしている	3.2	3.2	3.2
自分が担当している利用者の介護過程の展開を定期的に見直している	3.1	3.1	3.1
他の介護者の介護過程の展開を自分の介護にいかすことがある	3.1	3.1	3.1
他の専門職の利用者に対する話し方に注意することがある	3.0	2.7	2.8
他の専門職が利用者にとどのように接しているかを注意深くみることができる	3.5	3.3	3.4
他の専門職と自分の担当する利用者の話をすることで、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある	3.4	3.0	3.2
平均	3.4	3.2	3.3

③他者をとおした省察

全体では、「他の介護者が利用者にとどのように接しているかを注意深くみることができる」が3.7点で最も高かった。また、「他の専門職の利用者に対する話し方に注意することがある」が最も低く2.8点であった。（表4）。

(3) 学習する組織

学習する組織では、「チーム学習（以下：チーム）」「コーチング・教え方（以下：コーチング）」「組織に対する考え（以下：組織）」「遊び心・ユーモア（以下：遊び心）」「取組方に対する考え方（以下：取組）」の5つの領域で構成している。「チーム」に関する考え方が全体からみて4.2点で最も高い結果となった。最も低い領域は、「組織」で3.5点であった。（図3）

各領域の項目について注目する。チームでは、「職場では職員は、助け合ったり、教え合い、情報の共有を心がけている」が4.4点、コーチングでは「職場では、相手のミスを受容し、逆に成長のきっかけにしている」3.9点、組織では「職場で職員は、自分自身も全体の変化に関係していると感じていると思う」「職場で職員は、物事全てが

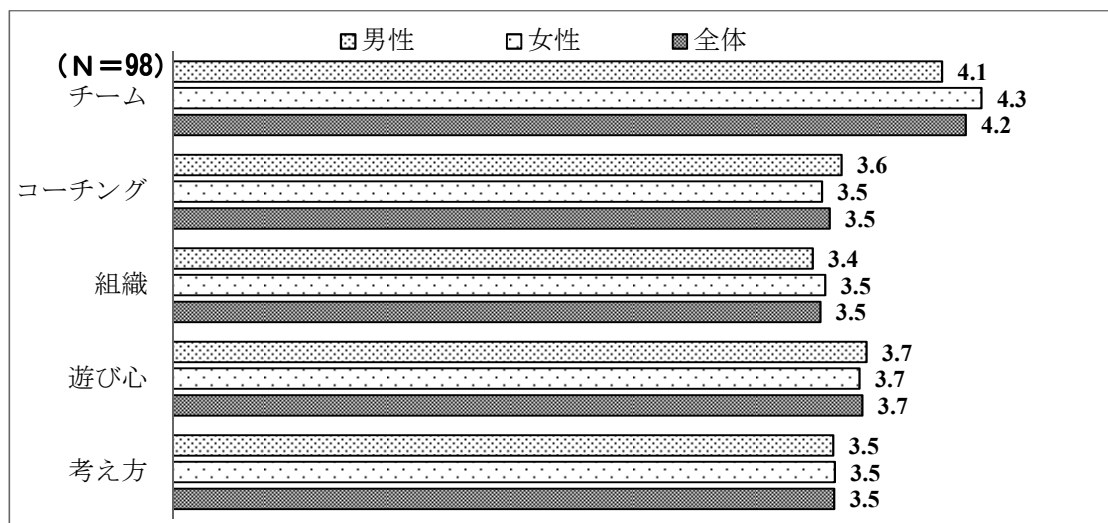


図3 学習する組織に関する項目

つながっていると考えていると思う」が各 3.6 点、遊び心では「職場では職員は、人を笑わせたり・楽しませたりすることが好きだ」が 3.9 点、考え方では「職場では職員は、自分の考えに固執せず、利用者の立場から考えるように心がけている」が 3.9 点で最も高い得点の回答であった。一方、コーチングの「職場では、やる気を引き出す仕組みがある」「職場では職員は、古い考え方ややり方に常に挑戦している」が 3.1 点で全体からみて最も低い回答であった。

4. 考察

保育における省察尺度を介護場面に置き換え、介護における省察に関する調査を単純集計から整理した。

4-1 介護人材

女性が 6 割を占めていた。最も多い年代は、20 歳代の女性で 5 割、最も少ない年代は男性の 60 歳代以上であった。雇用形態は、全体では約 9 割が正規職員であり介護福祉士が 7 割を占めていた。一方、今回の調査では、介護に関わる資格を保有しない者が約 1 割いることが明らかになった。

介護人材の課題として、介護の資格を保有しない者、経験 1 年未満の離職率が高いこと、介護職の資格を取得しながらも介護の分野で働いていない者が多くいることなどがある。また、本調査の対象施設のように 20 代女性の多い職場においては、介護のキャリア形成や結婚・出産・育児に対する子育て支援も重要な課題である。同時に子育て後の介護現場への復帰プログラムを準備し職場復帰への不安の軽減も図る必要がある。介護の職場が 20 代の女性の人生とともに成長できる職場になる工夫が、介護人材の確保と介護の質の向上にもつながると考える。一方では、増加する高齢者や重度の認知症ケアなどには継続的な介護が必要になる。各施設では、介護に関連する資格を取得しながら労働する環境を整え支援している。高校卒業後の 10 代の職員や様々な経緯で介護の職場と出会う中途採用者など、同じ支援の形態では仕事の継続が困難になることが予想される。人材の確保という視点では、「ゼロからのスタート」の人材に対する長期的な支援も必要である。そのためには、介護現場の職員の意識の向上も必要である。

4-2 省察について

今回の調査では、介護者自身に関する省察 (3.6 点)、利用者に関する省察項目 (3.6 点)、他者を通じた省察 (3.3 点) という結果から明らかなように、利用者に対する省察項目が最も高く、他者をとおした省察が最も低い結果であった。特に他者を通じた省察については、表 4 に示したように介護場面をより具体的にイメージした調査項目に変更を試みたが、予想に反して他者情報への分析が低いことが明らかになった。個別ケアの視点においては、介護過程の展開が重要となる。尾形は、最適なサービスを提供していくかが課題となり、課題の解決のために実際に介護サービスを提供する全段階で利用者のおかれている状態を把握し、サービス計画へ発展していくための重要な局面だと述べている²¹⁾。介護の省察を考える上で、他者をとおした情報の活用には、介護教育および介護現場におけるアセスメントとの関連を整理し調査項目の設定が必要である。

介護者自身に関する省察では、得点の高かった「利用者と話するとき、自分の言動や態度を意識することがある」「介護において自分の振る舞いに目を向けることがある」「利用者と話するとき、自分の態度に注意を向けることがある」「利用者と話するとき、自分の言動や態度を意識することがある」「利用者に対する自分の行動に気をつけることがある」の 4 項目は、全て Grimm(1988)の教師の省察の一次的省察(行動についての思慮深さ)であった。つまり、利用者を知覚的に観察し、理解し、気づく行動については意識的に取り組まれているといえる。しかし、「介護者としての信念について考えることがある」の二次的省察(今までの経験を再構成し、行為する状態に新たな意味を加える、新たな理解を形成する)については、意識的に取り組まれていない。つまり、利用者の知覚的な理解を分析・評価する行動(二次的省察)の強化が必要だと推測する。

利用者に関する省察では、「利用者と話した後、利用者がどのように受け止めたか、考えることがある（二次的省察）」のみ女性の平均得点が男性より高い結果であった。これは、利用者の分析・評価（二次的省察）に、男女の違いがあると考えられる。介護は、利用者の生活を支える生活支援の視点が必要になるが、男女で生活へのアプローチ法に特徴があると推測する。

他者を通じた省察では、「他の専門職の利用者に対する話し方に注意することがある」が最も低い結果であった。今回の調査では、介護職の職位については質問をしていない。また、カンファレンスや情報共有のシステムも施設により異なる。職位と情報共有との関係は、今後の課題としたい。また、「他の専門職と自分の担当する利用者の話をする中で、自分が担当している利用者の特徴に気づくことがある」では、二次的省察（分析・評価）が男性の方が高いことが明らかになった。男性の方が、他の専門職との連携を積極的に行っている可能性があるかと推測する。しかし、前述したように職位が影響を及ぼしている影響があるため今後の課題としたい。

4-3 学習する組織について

澤田は、介護ケアが成功するカギはチームケアに迫るところが大きくチームでの推進力にはコミュニケーションやリーダーシップが重要であると述べている²²⁾。今回は、チームの学習能力（自らを動かす力・複雑性を理解する力・共創的に対話する力）に注目した。つまり、介護者自身の省察を対象としている。しかし、チームケアを行う中で介護者が省察し、その情報をチームで共有する方法や介護課題の解決に向けたチームのリーダーの存在については検討していない。介護現場におけるチームケアのリーダーシップと介護場面における「自らを動かす力・複雑性を理解する力・共創的に対話する力」について合わせて考えなければならない。つまり、介護現場ではカンファレンスや会議の持ち方が様々である。情報共有の場についても注目する必要がある。介護者・チームリーダー・情報共有の場の3つのレベルを検討することで介護現場における学習する組織づくりを検討し、研修プログラムに活用したいと考える。

5. 本研究の限界と課題

本研究の課題は、5施設のみで実施し98名を対象とした調査であり数的に少ないことがあげられる。また、省察の態度に注目した尺度であるため省察の知識や技術、介護者の経験なども含んだ検討が必要である。

今後の展開として2点をあげる。まず、本調査の因子分析を行い信頼性と妥当性を確認し、省察行動と学習する組織の影響について検討し、介護の省察および介護の学習する組織の尺度開発を試みる。また、分析結果から省察パターンを分類し研修プログラムの提案し、研修プログラムの詳細を検討する予定である。

謝辞

本研究にご協力いただいた施設の施設長はじめ、ご協力いただいた職員の皆様に感謝いたします。

注釈

注1) Grimm¹³⁾の授業における教師の3つの省察レベルとは、第1レベルの省察は、行動についての思慮深さであり、意識的で熟慮的な働きがある。第2レベルは、良い教え方をめぐる考察、様々な活動から生じる結果を予想することが含まれる。第3レベルでは、今までの経験を再構成し、行為する状態に新しい意味を与えたり、新しい理解を形成することであると述べている。

注2) 杉村ら¹²⁾の保育の「省察の3層モデル」を以下に示す。

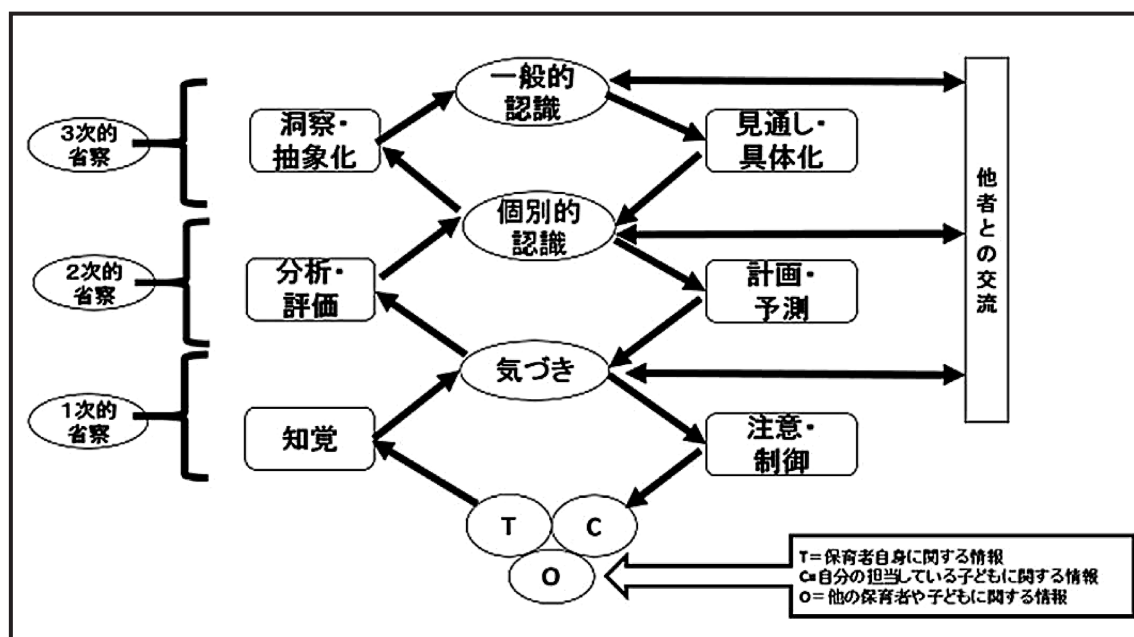


図4 省察の3層レベル²³⁾

引用・参考文献

- 1) ジョン・デューイ, 上田清次訳: 『思考の方法』, 春秋社, (1950)
- 2) ドナルド・ショーン, 佐藤学, 秋田喜代美訳: 『専門家の知恵 反省的実践かは行為しながら考える』, ゆみ出版, (2001)
- 3) 矢部弘子, 小林智美, 寺島洋恵: 「介護概論における介護過程の概念に関する諸説の検討」, 『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』3, pp.35-47 (2005)
- 4) 藤原紀子: 「介護福祉士の専門性と省察能力の向上を目指して」, 『仏教大学大学院社会福祉学研究家編』, 42, pp.69-70 (2014)
- 5) 堀恭子: 「省察的実践からみた認知症介護の困難性理解」, 『技術マネジメント研究』, 11, pp.25-29 (2012)
- 6) 藤原紀子: 「介護福祉士の専門性と省察能力の向上を目指して: 実習指導におけるプロセスレコードの活用を通して」, 『佛教大学大学院紀要. 社会福祉学研究科篇』, 42, p.79 (2014)
- 7) 杉山雅俊: 「教員養成における省察の視点のメタ認知に関する研究: 小学校理科の模擬授業を事例として」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第一部, 学習開発関連領域』, 61, p.142, (2012)
- 8) 上田修代, 宮崎美砂子: 「看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討」, 『千葉看会誌』, 16 (1), pp.61-68 (2010)
- 9) 浜口順子: 「保育実践における省察的理解の過程」, 『人間現象としての保育研究 (人間現象としての保育研究 1)』, 光生館, pp.155-191 (1999)
- 10) 杉村伸一郎, 朴信永, 若林紀乃: 「保育者省察尺度に関する探索的研究 (2) 省察の3層モデルによる検討」, 『広島大学心理学研究』, 6, pp.175-182 (2006)
- 11) 杉村伸一郎, 朴信永, 若林紀乃: 「保育者省察尺度に関する探索的研究 (1) 保育現場における反省的実践」, 『幼年教育研究年報』, 29, pp.5-12 (2007)
- 12) 杉村伸一郎, 朴信永, 若林紀乃: 「保育における省察の構造」, 『幼年教育研究年報』, 31, pp.5-14 (2009)
- 13) Grimmer, P.P.: The nature of reflection and Schons conception in perspective, *Reflection in teacher education*, Teachers College Press, pp.5-16 (1988)
- 14) 名須川知子: 「保育者の「気づき」による変容: 気になる子どもの行動解釈をめぐる保

- 育者の見方の変化とその影響」, 『学校教育研究』, 8, pp.19-35 (1997)
- 15) 名須川知子: 「生活保育の実践と保育者の資質」, 『現代生活保育論』, 法律文化社, pp.105-122 (2003)
- 16) 高橋謙一: 「「質の高い介護」と「質の高い介護福祉士」に関する一考察: 介護福祉士法およびカリキュラム改正からの検証」, 『日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要』, 14, pp.73-78 (2009)
- 17) 松本しのぶ, 奥田眞紀子: 「介護福祉士養成教育における社会人基礎力の育成(1): 介護福祉士養成課程と社会人基礎力教育プログラムの比較検討」, 『奈良佐保短期大学研究紀要』, 17, pp.11-23 (2010)
- 18) 藤江慎二, 佐々木 幸: 「介護福祉士の「振り返り」技術に関する研究」, 『介護福祉学』, 15 (2), p.202 (2008)
- 19) 村上逸人, 岡本浄実, 野田由佳里: 「介護における省察に関する研究: 省察力を活かしたプログラムモデルの作成に向けて」, 『聖隷クリストファー大学社会福祉学部研究紀要』, 7, pp.33-39 (2015)
- 20) 遠藤哲哉, 小野寺哲夫: 「自治体経営における「学習する組織」尺度の基礎的研究: ソーシャルキャピタルを含む10因子モデルからOJT研修の有効性を実証的に検討する」, 『青森公立大学経営経済学研究』, 13 (2), pp.43-61 (2008)
- 21) 尾形由起子: 「第3章 介護課題解決のための方法論」, 『介護過程(介護福祉士養成テキストブック8)』, ミネルヴァ書房, p.80 (2009)
- 22) 澤田信子: 「介護過程とチームアプローチにおける介護福祉士の役割」, 『介護過程(介護福祉士養成テキストブック8)』, ミネルヴァ書房, p.37 (2009)
- 23) 杉村伸一郎, 朴信永, 若林紀乃: 「保育における省察の構造」, 『幼年教育研究年報』, 31, p.11 (2009)